

## OP21\* 診断5年以降に新規臓器病変の出現を認めたサルコイドーシスの4例

Four cases of sarcoidosis whom new organ involvement appeared 5 years after diagnosis

○櫻井 章吾、井上 裕介、河野 雅人、穂積 宏尚、鈴木 勇三、柄山 正人、古橋 一樹、藤澤 朋幸、榎本 紀之、中村 祐太郎、乾 直輝、須田 隆文

浜松医科大学 内科学第二講座

我々は当学会において、サルコイドーシス診断後、中央値で7.7年の経過観察が可能であった症例の長期経過について報告した。今回、診断から5年以上経過後に新規臓器病変の出現を認めた症例について報告する。1990年から2012年までに当院でサルコイドーシスと診断された症例のうち、診断時よりステロイド治療が行われた症例と観察期間が短い症例を除いた150例中、以下の4例で新たに臓器病変が出現した。サルコイドーシスの診断と臓器病変の評価はATS/ERS/WASOG およびJSSOGの基準に従った。

【症例1】初診時53歳、男性、初診時の罹患臓器は肺・眼。7年

経過後に心臓および脾臓に新たに病変が出現した。ステロイドとメトトレキサートが投与されたが、リンパ腫を発症し、ステロイド単剤にて加療中。

【症例2】初診時73歳、女性、初診時の罹患臓器は肺・眼・皮膚。8年経過後に心臓に新たに病変が出現した。洞不全症候群に対してペースメーカーを挿入した。

【症例3】初診時67歳、女性、初診時の罹患臓器は肺・眼。10年経過後に皮膚に新たに病変が出現した。

【症例4】初診時49歳、男性、初診時の罹患臓器は肺。8年経過後に皮膚に新たに病変が出現した。

## OP22 当院呼吸器内科外来で全身性サルコイドーシスのフォロー中、寛解後に増悪を認めた症例の臨床的検討

○蒲生 俊一<sup>1)</sup>、玉田 勉<sup>1)</sup>、村松 聡士<sup>1)</sup>、村上 康司<sup>1)</sup>、奈良 正之<sup>2)</sup>、杉浦 久敏<sup>1)</sup>、一ノ瀬 正和<sup>1)</sup>

1) 東北大学大学院 医学系研究科 内科病態学講座 呼吸器内科学分野、2) 東北大学病院 臨床研究推進センター

【背景・目的】当科サルコイドーシス(サ症)外来通院中、1年以上の寛解後に増悪した症例に関し、その臨床的特徴、治療や予後の検討を行った。

【方法】2000年から2015年に当科初診でサ症と診断された274例中、無増悪256例をA群、診断後1年以上の寛解後に増悪した18例のうち、寛解期間5年未満の8例をB1群、5年以上の10例をB2群とし解析を行った。

【結果】其々A:B1:B2群の順に診断時平均年齢48.5:44.6:40.0歳、女性の割合は59.8:62.5:50.0%。診断時平均血清ACE値は21.6:20.6:20.2 IU/Lと差を認めなかったが、平均

sIL-2R値は953.1:568.0:1775.3 U/mLとB2群で有意に高値だった。増悪群で寛解から増悪までの期間は1年から22年で、平均6.8年。増悪と判断した臓器は、延べで肺5例、心臓6例、骨4例、肝臓3例、脾臓1例、皮膚3例、眼3例、BHL3例、その他リンパ節腫脹3例。増悪後の全身ステロイド導入はB1群4例、B2群7例。死亡例はA群1例、B1群0例、B2群0例であった。

【考察】寛解後増悪には心臓病変出現のように予後を規定し得るものも含まれ、新規病変スクリーニングの重要性が認識されると共に、長期間寛解維持例でも診断時sIL-2R高値の場合はより注意が必要と推察された。

## OP23 自然軽快傾向にある肺サルコイドーシス症例の検討

○石本 裕士、坂本 憲穂、由良 博一、中島 章太、原 敦子、角川 智之、石松 祐二、迎 寛

長崎大学大学院医歯薬学総合研究科 展開医療科学講座 呼吸器内科学(第二内科)

【背景と目的】長期的には自然寛解する症例も多いサルコイドーシスであるが、予後には多様性があり、診断後の経過観察は症例ごとに手探りで行っていきことが多い。そこで、今回、自然軽快傾向にある肺サルコイドーシス症例の臨床的特徴を検討することで予後予測因子を検討することとした。

【方法と結果】当院にて2008年4月から2013年3月までの5年間に肺サルコイドーシスと診断された85例のうち3年以上の経過観察を行うことができていた50例を対象とし後方視的に検討した。全身性のステロイドを要した症例が14例であったが、不要であった36例の肺病変の経過を胸部X線もしくはCTにて評価

したところ、改善7例、不変28例、悪化1例であった。診断時の気管支肺胞洗浄液(BALF)中のリンパ球分画(平均±標準偏差)は、改善群(56.7±12.0)が不変群(37.2±23.6)と比較して有意に高値であった。

【考察】全身性ステロイドを要さない肺サルコイドーシスにおいて、BALFのリンパ球高値は予後良好因子である可能性が示唆されたが、本検討は単施設における後方視的検討であり、また病態解明も含めてさらなる検討が必要である。